



エッセイ

## リタイアシニアの再教育

環境企画 松村 眞

発行日

2013.10.5

ある会合で、リタイア世代を対象とする再教育の場が広がっている話を聞いた。調べてみると、職能とは結びつかない教養講座が多い。歴史や文学のような科目もあれば、経済や国際関係など社会の仕組みに関する講座もある。「・・・市民大学」と称して、大学の名をつけているのもあれば、既存の大学が企画したリタイアシニア専用の講座もある。大学が設置する場合は、学生が学ぶ同じキャンパスで開講されることが多い。学校によっては、ペギー葉山が歌った“学生時代”にある「蔦の絡まるチャペル」で、再び大学生気分を味わえるのだ。食堂や図書館で若い学生と席を並べる機会もあるし、同じ講義を受けられる講座もある。文科省が認可する大学ではないから、修学年数や習得単位数は教育機関が独自に決めている。大学の認可基準に適合しないから、「学割」定期は使えない。

面白いと思ったのは某私大が都内で開講したシニア大学で、入学資格は 50 才以上としているが、受講者の平均年齢は 62 才とのことだった。ほとんどが現役を退いたリタイアビジネスマンか、子供が成長して手がかからなくなった主婦である。入学するには志願理由を 2500 字程度の小論文にして提出し、それを題材に 20 分程度の質疑応答を受ける。筆記試験はない。修学年限は本科が 1 年で、希望すればさらに 1 年の専攻科が用意されている。受験料は 1 万円で、入学金に相当する登録料が 10 万円、授業料に相当する受講料は年 30 万円である。カリキュラムは半年で完結する前期と後期に分かれており、それぞれ週 5 日間にわたって 90 分の講義を 1 日に 2 コマ受けられる。8 月と 9 月の夏休みには、3 日間の集中講義を受講できる。全受講者は、テーマ別に用意されたゼミナールのどれかに参加し、担当教官の指導を受けて終了論文を作成する。合宿や委員会活動があり、受講者同士が親交を深めたり、今後の生き方を話し合ったりする。シニアの新しい仲間作りにも配慮しているのではないだろうか。

次にこの大学の設立の趣旨と、教育の内容を説明しよう。リタイアシニアが対象だから、趣旨は「学び直し」と「再チャレンジ」のサポートとなっている。「学び直し」というのは、文字通り今まで関心があっても勉強できなかったことを、きちんと学び直そうとするものである。知らなかったことを知るのは、本来は楽しいことなのだが、学生時代の勉強は、楽しむよりも単位の取得に追われていたであろう。だからこの大学では、各自が自分のペースで、試験の点を気にせずに自由に勉強できる環境を整えている。目的は学ぶことを楽しむことだから、科目は職能とは結びつかない美術や思想などが多い。私の友人にもリタイアしてからイスラム教を勉強している元同僚や、日本の古典文学に傾倒している者がいる。自由に学ぶ場と機会は、リタイアシニアに一定のニーズがあるのだ。

私の関心は、もう一つの趣旨にある「再チャレンジ」のサポートである。今は寿命が延びたから、ビジネスマンは現役を退いた後でも20年ぐらいは元気な時間がある。女性も子供が独立して家を離れた後に、やはり20年以上の自由な時間がある。だが、この時間をどのように過ごせば充実したシニアライフになるのか、そのためには何を学び、何をすればよいのか教えてくれる人はいない。自分で考えて決めればよいのだが、過去にはこれほど長く高齢者が元気で暮らせる社会がなかった。だからほとんどの人が、参考になるガイドラインもメニューも、そして事前の準備もないままリタイア生活に突入してしまうのだ。充実したシニアライフを支援し、地域にも貢献してもらう仕組みは、社会的にも必要であろう。だが今はまだ、期待に応えられる状況から遠いのではないだろうか。

ではこの大学が「学び直し」と「再チャレンジ」のサポートに向けて、どんな内容の講座を提供しているか紹介する。講座群は三つの分野で構成されている。一つは「エイジング社会の教養科目群」で、歴史、思想、宗教、人類、美術などが中心である。「学び直し」の希望が多い科目群といってもよい。二つ目は「コミュニティデザインとビジネス科目群」である。シニアが地域で社会活動を始めるときに役に立つ科目群で、コミュニティ形成、ボランティア活動、経済と金融、ソーシャルビジネスなどがある。このような科目を一通り受講すれば、「再チャレンジ」のための基礎的な知識を習得できるだろう。

シニアライフなのだから、再チャレンジなど考えずに自由気ままに過ごせばよいと考える人もいるだろう。しかし、自由気ままなだけで20年ものシニアライフを充実させるのは、かなり難しいのではないか。人生の充実には、マズローのいう5段階の欲求を充足させるのが望ましいのだ。第1段階は食欲や睡眠などの生理的欲求で、第2段階は住宅や衣服など安全性の欲求である。第3段階は家族や友人などとの良好な人間関係で、社会的欲求といわれる。第4段階は他人から尊敬や評価を得たいという自我の欲求で、第5段階は人や組織を自由に動かしたい自己実現の欲求である。リタイアシニアのほとんどは、第3段階までの欲求は満たされており、第4段階の自我の欲求も、現役だった頃にはかなり満たされていたであろう。ビジネスマンなら仕事を通じて社会の役に立っていた実感があり、顧客からも社内からも評価されていたはずだ。家庭の主婦は日常の家事で家族の役に立ち、夫や子供から感謝され、家庭を取り仕切るそれなりの充実感を得ていたのではないか。

だが組織を離れたリタイアビジネスマンや公務員は、外向けの仕事がないから第4段階の人に認められる充実感が希薄になってしまう。家事万端をこなして家庭をマネージしてきた主婦も、子供が家から出てしまえば家事は半減し、それだけ家族に認められ感謝される機会が減ってしまう。したがって充実したシニアライフを過ごすには、活動の場を過去に所属していた組織や家庭から地域社会に広げ、人の役に立っている実感を得ながら、認め

られ評価される機会を得るのが望ましいのだ。では社会活動って何だろう。どんな種類や組織があり、どんなビジョンで活動しているのだろうか。ボランティアやNPO活動の概念はわかるが、運営方法も参加形態も多様なので、株式会社や行政組織のような固定的なイメージが通用しない。シニア大学の「コミュニティーデザインとビジネス科目群」は、自分がこれから踏み出すかもしれない社会活動の概要を体系的に把握し、求められる基本要件を理解する助けになるであろう。カリキュラムを構成する三つ目の科目群は、「セカンドステージ設計科目群」で、受講者がこれから進むセカンドステージの設計をサポートする。生活設計に有用な科目には、健康、家族関係、住まい、メンタルヘルスなどがあり、社会活動に関連する科目には、市民生活、地域ケア、成熟社会などがある。受講者は三つの科目群を受講し、終了論文の作成を通して自分のセカンドライフを設計するのである。このシニア大学には、修了者が参画する社会活動を支援するサポートセンターもある。現在はNPOなど8団体が登録され、のべ200人以上の受講生や修了生が、社会貢献を目指して自主的な活動を展開している。

私はサポートセンターを構成するNPO法人の代表からも意見を聞いたが、シニアになって社会活動に参加する人には、いくつかの問題があるという。とくに男性に多いのは、以前の組織のルールを持ち込もうとする、以前の役職や知識をひけらかす、上下関係を重視する、自分の興味があることにこだわる、などとのことであった。このような態度が見えると、周囲は容易に受け入れなくなるので、絶対に避けなければいけないとのことだった。過去数十年にわたって仕事一筋に生きてきたビジネスマンには、現役時代の仕事に対する考え方や評価の尺度が染みついている。だから職場中心ではなく地域中心、職業ではなくボランティア中心のセカンドライフに移行するには、思い切った意識の変革が必要なのである。シニア大学の1年間は、こうしたマインドのリセットにも有効であろう。意識変革があつて初めて、セカンドライフに必要なスキルを身につける意欲がでてくるのだ。

ではセカンドライフに必要なスキルって何だろう。よく「シニアの専門的な知識と経験が有効に生かせる」と聞くが、私は現役時代と同じような企業への再就職以外に、そんな場はほとんどないと思っている。地域社会が中心のセカンドライフで大切なのは、相手の意見をきちんと聞いて対応するコミュニケーションスキル、迅速な事務処理スキル、具体的な作業計画を立案する企画スキル、それにマネジメントスキルではないだろうか。これらは専門能力ではなく基本的なビジネススキルである。現役が技術職の場合は専門家の意識が強いが、セカンドライフは現役の延長線上にはない別の世界という意識変革が必要ではないか。ボランティア活動とビジネス活動は、報酬水準が違うだけで、義務や責任には全く変わりがないことも認識しなければならない。この認識もリタイアシニアのマインドリセットに含まれるかもしれない。人は約40年の職業生活のために10年以上の教育を受ける。20年間のセカンドライフを始めるには、1年程度の再教育で意識を変え、価値観と評価尺度を変え、目標を構築し直す意義があるのではなかろうか。 (おわり)